

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	星のさと全体の共通理念「一人一人に一人一人の介護を」をスタッフ全員で共有している。毎日の申し送りやカンファレンス、スタッフミーティングなどで話し合いながら日々のケアにつながるよう取り組んでいる。	理念と運営方針をもとに職員は行動している。「星のさと」の由来は法人代表者が「さとさん」という地域の方の名を頂きつけた。その名前の内には地域の方との関わりや地域貢献といった意味が秘められているのではないだろうかと思われた。職員の勤務年数も長く、ホームの理念をよく理解している。運営推進会議でもホームの理念について話し、理解していただくようにしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域のボランティア「ひめりんごの会」の皆さんが毎月訪ねて来て下さったり、地域行事の文化祭やお神楽に参加している。星のさと行事の星のさと祭りなどでも交流している。	ホームは複合施設敷地内の道路から奥へ入ったところにあるため住民の関心は老人保健施設に向かいがちであるが、紙芝居、手品、フラメンコ、抹茶によるお点前など、地域のボランティアの定期的な訪問があり利用者とは交流している。野菜・果物など沢山の差し入れが地域の方からあり、利用者と職員が手を変え品を変えおやつや料理にし食卓をにぎわしている。管理者が依頼を受け、短期大学で高齢者福祉についての話をするなど認知症についての啓蒙活動にも関わっている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議でホームでの認知症ケアの取り組みを報告したり、相談等があれば随時対応している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	利用状況や活動状況、評価結果の報告、入居者の皆さんとの交流などを行っている。そこでの意見等は、日々のサービス向上に向け参考にしている。	家族、区長、民生委員(7名)、あんしん(介護)相談員、地域包括支援センター職員、医師等のメンバーで構成され、年に6回開催している。委員会の後に行事を予定している時もあり、全家族に参加の呼びかけをしている。利用者状況やホームの活動の報告を主に、「消防訓練」、「看取り」、「認知症の対応10ポイント」などをテーマに話している。家族からは「こんなことまで一生懸命に話し合いをしてくれている」との感想が寄せられるほど熱心に話し合いが行われている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	長野市の集団指導に出席している。市から派遣されるあんしん相談員の受け入れを行っている。	「あんしん(介護)相談員」が市より派遣され、運営推進委員会の委員にもなっていた。介護保険の認定調査員を受け入れ利用者の情報の提供を行っている。区分申請を家族より依頼され代行もしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	スタッフミーティングで身体拘束について学ぶ機会を設けている。日々、身体拘束をしないケアを前提としてケース検討を行い、工夫しながら対応している。	併設の老健との合同の勉強会やグループホーム独自の勉強会を行い、職員は身体拘束をしないケアについて理解している。日中、玄関の鍵は掛けていない。ベッドで転倒の危険のある方は絨毯の上に布団を敷き対応している。外出傾向の強い利用者については情報を収集しその方の理解に努め、ケアに反映するようにしている。利用しはじめに外に出たがっていた利用者もホームの生活に少しずつ慣れると気持ちもおさまってくるが、夕刻や夜眠れないときに家に帰りたいという気持ちが起ることもあり職員が寄り添って穏やかに話しをしている。	

グループホーム星のさと・鷹棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内の虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	スタッフミーティングで虐待について学ぶ機会を設けている。スタッフ間で虐待が見過ごされることがないように互いに意識してケアしている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	スタッフミーティングで学ぶ機会を設けている。実際に成年後見制度を利用している入居者がいる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時は、書面と口頭で説明している。必ず不明な点等を尋ねて、理解・納得を頂けるよう対応している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者や家族とは、日頃からコミュニケーションを図りながら、意見や要望を言いやすい関係・雰囲気づくりを心がけている。特に居室担当は年間通して意見等を表しやすい関係を築く努力をしている。	毎月「生活状況連絡票」が家族へ送られている。生活全般・食事・排せつ・移動・入浴・医療・行事・個人購入立替え品などの項目に管理者が丁寧な文章で綴り、日々のスナップ写真が何枚も貼りつけられている。家族会は「星のさと祭り」、「敬老会」、「クリスマス」の3大イベント時に同時開催している。今年度の敬老会も全家族の参加で賑やかに行われた。家族との交流の機会にはその都度話を聞き運営に反映している。家族へは職員の写真と名前を印刷した便りも届けられている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	意見を言いやすい又は、相談しやすい雰囲気づくりに努めている。その中で反映できることは反映させている。	ホーム全体での定例会を月1回開催している。業務に関する連絡や見直し、マニュアルの読み合わせなどを行っている。職員は1年間、居室担当として2～3名の利用者を担当している。ユニット間の固定は無く、常に流動的に職員を配置している。職員は半数以上が5年以上の勤務者で職員間の信頼関係が出来上がっている。新入職員の教育にはなるべく同年代の職員を配置し話しやすく慣れやすい環境を作っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	個々の努力や能力を評価し賞与等に反映している。又、有給休暇は希望を取り入れている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	協力医療機関から専門職(認定看護師)を外部講師として招いたり、専門学校で教員を講師として招き、ケアのスキルアップとなるよう機会を設けている。		

グループホーム星のさと・鷹棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	長野県宅老所・グループホーム連絡会の会員になっている。又、善光寺平グループホームねっとに参加しており、勉強会などを通して交流している。そこで学んだことや情報などをスタッフに伝えて、サービスの質の向上に取り組んでいる。		
<b>II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	基本的には、入居前に本人とお会いしている。その様子やアセスメント情報、関係事業所からの情報等を皆で把握して、少しでも安心でき、想いに寄り添えるよう配慮している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居までの段階で、心配なことや要望を聴いたり、荷物搬入時などでも挨拶を交わしながらコミュニケーションを取るよう配慮している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	申し込みや面談の際に、どのようなサービスを希望され、必要としているのかを一緒に考えている。関係事業者とも情報を交換しながら、ニーズに沿ったサービス利用ができるよう対応している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	スタッフは出来ないふりや知らないふりをして、教えてもらったり、一緒に行ったりと支え合う関係を大切にしている。心身の力が発揮できる場面作りを大切にしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	毎月の生活の様子を手紙や面会時などにお知らせしている。行事や誕生日に参加して頂き、家族も一緒に本人の暮らしを支えて頂けるような関係を築いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家や馴染みの床屋・歯医者・店などに出かけたり、法事に出席して親類の方とふれあっている。昔からの知人がホームに訪ねて来て下さることもあった。	先生だった利用者の教え子が訪ねてきたり、自宅近所の同年代の友人の訪問を受ける利用者がいる。特別な日(誕生日・敬老の日)に遠方の孫などからお祝い品が届けられると利用者が電話でお礼を返したり、手紙を書きそれを居室担当者が写真を同封して送るなどの支援をしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の相性を観察しながら、ソファなどで一緒に過ごしたり、家事参加などを関わり合いながら行っている。洋服を褒め合っていたり、相談にのっている姿や、散歩に出かけた時に車いすの方を歩ける方が押して下さる姿も見られている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居後に隣接する老健に入所されている方には、老健で挨拶をしたり、可愛がっていたホームの飼犬に会いに来たりしている。又、退居されたご家族がホームに訪ねて来て下さることもあった。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	居室担当をメインに、意向の把握に努めている。日々かかわりながら、アセスメントカンファレンス等でスタッフの皆の意見も聴きながら思いや意向の把握をしている。常に入居者にとってどうなのかを考えた視点を大切にしている。	職員は日常生活で決めつけることはしないで常に語りかけ、利用者に判断していただくように考え行動している。訪問調査時のお茶の時間でも職員が何種類もの緑茶やコーヒー、紅茶などを利用者に見てもらい、「今日はどれを飲みますか」と聞いていた。利用者もニコニコしながら時間を掛けて選んでいた。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前の段階で、本人・家族・ケアマネジャー・サービス事業者などからこれまでの暮らしについて情報を収集している。その情報をスタッフ皆が把握できるように伝えている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々かかわりながら、認知機能や心身状態、その時の気分、睡眠、体調など現状の把握をしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日々の申し送りやカンファレンスなどで本人・家族・スタッフ皆の意見を聴き、センター方式のアセスメントを活用しながら、本人が暮らしの実感が得られるような介護計画の作成に努めている。	居室担当職員がセンター方式でアセスメントを行いカンファレンスで検討を加え計画作成担当者が作成している。定期的な見直しの時には家族よりの希望を書面で頂き、計画に取り入れている。利用者の状態が変わった時には計画の変更をかけている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別のカルテに記録している。実践した内容など情報を申し送り、必要に応じて介護計画を見直している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	自宅へ送り迎えする支援や訪問マッサージの利用、隣接する老健の理学療法士に状態をみてもらってアドバイスをもらうなど、ニーズに出来るだけ柔軟に対応できるよう支援している。		

グループホーム星のさと・鷹棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域のボランティアの方たちがホームに訪ねて来て下さっている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	主治医は本人・家族の希望で決めている。主治医とは、情報を提供しながら、連携を密にし、適切な医療が受けられるよう支援している。体調の変化や薬の変更があった場合には、家族に連絡している。	本人や家族の希望に沿って、同じ法人の脳神経外科と内科医院の医師を主治医としている利用者が多い。職員に看護師がいることや敷地内に内科医院があること、併設の老健の理学療法士の協力が得られることなど、利用者や家族にとって健康面での安心感も広がっている。理学療法士に利用者の靴についての指導を受けたり、個人で契約し訪問マッサージを受けている利用者もいる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	スタッフとして看護師が勤務している。介護職は、気が付いたことなどを報告・連絡・相談するようにしている。又、隣接する老健にいる総看護師長に相談しながら、適切な受診や看護が受けられるよう支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係	入院した際には、情報を提供したり、地域連携室と情報を交換している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	今年度の運営推進会議では、ホームでの看取りの支援の取り組みについて報告する機会を設けた。出席した家族からは早い段階から今後のことを考えるいいきっかけになったとおっしゃって頂いた。又、必要に応じて面談しながら、本人や家族の意向をできるだけ尊重した対応ができるよう心がけている。今までに4名の方をホームで看取らせて頂いた。	契約時に重度化や看取りについての説明をしている。利用者の状況に応じて早めに家族と話し合い、直面した時には再度行っている。今年度は101才の方の看取りがあったという。家族の納得する場所を探す手助けをしたり、ホームでの看取りを考えたり、また病院や併設の施設への住み替えを提案したりと家族が納得できるようにしている。過去4名の方を見送ったが、常に「これで良かったのか」と反省し次に繋げている。家族から「これで良かった」という言葉をいただき職員も嬉しく思っている。年末にお餅をつき亡くなった利用者の家族へ届けている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	スタッフミーティングで応急手当について学んだり、急変時の上申の目安などを学ぶ機会を設けている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	ほぼ毎月、時間帯やスタッフ体制など様々なことを想定した消防避難訓練を行っている。10月には、隣接する老健や水野医院と合同で避難訓練を行い、消防署・地域の消防団・南組の区長・副区長さんにも参加してもらい、夜間の想定と地域の人達との連携をテーマに訓練した。	各居室の入口には表面に名前と「自立歩行」・「車椅子介助」などの目印が貼られ、裏面には「避難済み」の文字が書かれたものがかけられている。毎月利用者とともに訓練を行い、利用者も体で覚えている方が多くなっている。10月の複合施設との合同訓練は実際に17時過ぎから夜間想定で行い、真っ暗な中での訓練から課題や反省点を上げ、非常時に備えている。スプリンクラーや煙排出器等の設備も完備されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	性格や今までの社会的な立場などを配慮しながら、一人一人に合った言葉かけや対応を心がけている。	利用者の歩んできた人生を尊重しプライドを傷つけないように利用者の笑顔をモノサシとしている。耳の不自由な方でも利用者によってはやみくもに大きな声で話しかけるのではなく、ゆっくりとはっきりと話すようにしている。利用者と職員の会話が多いことからつい友達のような関係で話してしまうことがあり、職員同士で注意し合っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	一人ひとりの力量に応じて思いや意思表示ができるような聴き方をして、飲み物や食べたい物、やりたい事、過ごし方など自己決定できるよう支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	思い思いに過ごせるよう、それに合わせて柔軟に対応できるよう心がけている。外に出かけたり、かぼちゃの煮物を作ったり、自宅に帰ったり、好きなことをして過ごす思いの時間を大切にしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人や家族と話し合いながら、好みの服装・髪型(カラー・パーマ)ができるよう支援している。夏祭りで浴衣を着たり、誕生日に着物やスーツを着る方もいた。年1回の記念写真撮影では、ご家族にも協力してもらい、お洒落や正装をして写真撮影している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	野菜を切ったり、味見をしたり、食べたい物(肉じゃが・かぼちゃの煮物・野沢菜づけなど)と一緒に作ったりと一人ひとりの意欲や力量に合わせて食事の準備をしたり、スタッフも一緒に食事をしながら楽しい雰囲気大切にしている。	食事作りは利用者と職員と一緒に作り食べている。刻みやおかゆの組み合わせの方もいる。畑で採れた大きなさつま芋に利用者が包丁を入れていたが職員は遠くから見守り、タイミングを見計らい手伝っていた。にぎやかに話をしながら食事の準備をする光景は一般家庭と変わらなかった。誕生日には居室担当者手作りのケーキでお祝いをしている。外食をしたいという希望があれば2~3人の利用者と職員で馴染みの食事処へ出かけている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	隣接する老健の管理栄養士がたてた献立を使用し、バランスの良い食事を召し上がっている。食事量・水分量を毎日把握し、状態に合わせてきざみ食など形態を変更したり、飲み物でゼリーをつかって水分が摂取しやすい様工夫している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、歯磨きを状態に合わせて行っている。クルリーナや歯間ブラシ、洗口液など必要に応じて使用している。又、口腔内の状態を観察しながら、歯科医や歯科衛生士に相談することもある。		

グループホーム星のさと・鷹棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの状態やタイミングに合わせて排泄の支援を行っている。習慣から男便所を使用する人もいる。又、失禁が増えてきた場合には、排泄パターンの把握に努め、どのような失禁が多いのかなどを把握したうえで、対応方法を検討している。	半数くらいの方が自立している。自立していない方もトイレでの排泄を基本としている。失禁の多い方は様子を見ながら対応し、安易にオムツなどへの変更はしないようにしている。居室にポータブルを持ち込んで排泄を試みたりはするが、常時居室には置かず職員がすぐに片づけるようにしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分を多く摂取するよう対応している。散歩などで体を動かしたり、オムツ使用の方でもトイレに座することで排便が促されるよう支援している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	基本的には、入浴日を決めているが、希望により別の日などに入浴して頂くこともある。個別のシャンプーを使用したり、好みのお湯の温度、入浴剤などを使用して入浴を楽しめるよう支援している。	週に2回の入浴を基本としている。安全を第一とし全員が見守りと介助を受けながら入浴している。脱衣場は床暖房で温められ、大きな浴室にユニットバスが二つ設置されており、利用者2人一緒に入浴が出来る。家族から車椅子の利用者の入浴方法を聞かれ、職員が指導し、家族と温泉に向いた利用者や希望に沿ってスタッフと日帰り温泉に行った利用者もいる。状況により3人の職員の介助を受けて入浴された方もいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	体調や状態に合わせて休息できるよう支援している。居室だけでなくソファーや和室で休息することもある。又、電気シーツや湯たんぽを使用したり、シーツ交換を定期的に行い、気持ちよく眠れるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個別のカルテには薬の用法・用量が記載されている。又、目的や副作用がわかるよう薬のファイルがあり、いつでも確認できるようになっている。服薬に関しては力量に応じて支援している。又、症状の変化にも留意している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	おやきや押し寿司などなじみの食べ物を作ったり、日記を書いたり、畑仕事をしたり、皆さんの歌の指揮をして下さったり、ケンタを可愛がったり、カメラを持って写真を撮ったりと生活歴や心身の力、意欲に応じて役割や楽しみが実感できるように支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	散歩したい。○○を買いたい。美味しい物を食べに行きたい。家に帰りたい。などの希望があった時にはなるべく「今でしょ！」でその時に支援できるよう対応している。又、希望が表せない方でも、家族や今までの生活歴から出かけた場所の把握に努め、出掛けられるよう支援している。家族と温泉旅行に出かけられた方もいた。ホームでは毎月、行事を計画し、外出行事ではご家族にも案内して参加して頂いている。	年間の外出計画は立てずにくじ引きで月毎の外出係を決め、その都度担当職員が計画し、善光寺や飯綱高原、お花見等へ出掛けている。家族にも呼びかけることもあり、その日の天候を見てホームだけでお昼を作り出かけることもある。利用者は自分の思っていることを表現したり伝えることが年々出来なくなってきているので希望した時に利用者の思いを尊重し即行動に移している。	

グループホーム星のさと・鷹棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	一人ひとりの力量に応じて、個別で財布(お金)を所持している方が数名いる。買い物や個別外食などでお金を使っている。ホームに来た花屋さんからシクラメンを購入する方もいた。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族から、ハガキ・手紙が届く方もいる。又、手紙を書いて写真と一緒に家族に送る支援もしている。希望があれば、いつでも電話できるように対応している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホームには季節の花や果物などを飾って、季節感を大切にしている。中庭の採光が心地よく、和室や居室の窓から見える外の景色は季節感に溢れている。エアコンや床暖房の使用で快適な温度で過ごせるよう配慮している。又、生活の音(家事仕事の音)は家庭的な雰囲気伝わってくる。	リビングとキッチン、和室が一つのフロアで、キッチンに利用者が立ち、それを他の利用者が見ながら和室で横になったリイスに座ったりして眺めている。ソファーに座り好きな番組のビデオを見ている方や収穫したサツマイモをじっと見ながら微笑んでいる方など、思い思いに過ごしている。ボードには行事のスナップ写真が張り出されている。各ユニット中央には坪庭がありガラス越しに見ることもでき、全体に落ち着いた雰囲気となっていた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	思い思いにソファーやホールで過ごしている。仲の良い方とこたつにあたりたり、ソファーで体を寄り添って過ごすこともある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ソファーやこたつ、テーブル、椅子、布団、写真、本、テレビ、塗り絵、ハーモニカ、鉢花など、一人ひとりが好きな物や居心地良く過ごせるような居室になっている。	炬燵が中央に置かれポットやお菓子が用意してある居室、テレビのある居室、本が多く置かれお気に入りの絵柄のカレンダーが飾られた居室など、「ここは私の部屋」という一人ひとりの個性を感じさせる空間となっていた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ホーム内はバリアフリーになっている。世話を焼き過ぎず、手をだしすぎず、一人ひとりが心身の力を発揮して暮らせるように支援している。もちろん安全面にも配慮しているが人としての尊厳を大切に支援に取り組んでいる。		